

成田 歴史 玉手箱

● 28回 ●

**歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。**



三橋鷹女^{たかじよ}は、明治32年成田の田町で生ま

れ、女流俳句の先覚者、
萬手寮、山中知子氏所蔵

昭和の女流俳人の最高峰の一人としてその才能を高く評価された人です。一方、師や弟子をもたず有名結社にも属さず、俳壇の中であって交流関係が極めて少なく孤高の俳人とも呼ばれました。

昭和22年ころ、そんな鷹女(48歳)と出会い、師として迎え俳句の指導を受けた一つの句会がありました。日鉄鉱業(現日本製鉄鉱山部門分離会社)の社内サークル「ゆさはり句会」です。会員の一人がたまたま鷹女の夫(東謙三・俳人)と遠縁にあたり、鷹女の自宅に句を持ち込んだのが縁の始まりでした。句会の名称「ゆさはり」とはブランコのことです。初めての句会で接した鷹女の俳句に鮮烈で新鮮な衝撃を受け、皆がブランコのように心が揺れ動き共感したことから付けられた名前です。この時すでに鷹女は『向日葵』『魚の鱗』を刊行し、俳壇における地位は揺るぎないものでしたが、そんなことをまったく知らない素人の集団でした。

当時の会員の一人は、句会での鷹女を「厳しく気迫に満ちた姿がありました。また、一人ひとりの個性に応じた丁寧な指導でした。俳句は人まねではいけない、自分を厳しく律しなさいと。常に自らの句に反省をし、長く時間をかけ物事を見据えていく人でした」と語っています。また、「第4句集『羊歯地獄』の出版記念パーティーには会員全員が招待されました。普通では考えられませんよ



群馬県水上町藤原湖吟行時の記念写真(昭和35年ころ、安村和馬氏所蔵)

ね。自宅に遊びに行ったときには手料理でもてなしてくれ、会員の結婚までも心配していただきました。毎年、泊りがけの吟行会やダンスパーティーにもご夫妻で参加していただき、とても優しく穏やかな先生という印象が強く残っています」と鷹女の知られざる素顔も伝えています。

鷹女の熱く優しいまなざしのもと、いろいろな事に出会い歩んできたゆさはり句会は、昭和47年4月に鷹女が亡くなるとともに自然消滅しました。しかし、鷹女の13回忌に成田へ墓参したときに開いた再起句会から活動を再開し、その後、上町薬師堂前の鷹女像除幕式、生誕100周年などの節目には必ず成田を訪れています。現在15人足らずの小さな句会ですが、半世紀にわたって鷹女の素顔や生き様を見つめ、今なお成田と鷹女を結び付ける唯一の生き証人です。



ゆさはり句会第2句集『叫鷹』完成記念。前列右から2番目が鷹女(昭和36年2月25日、安村和馬氏所蔵)

半世紀にわたり師と仰ぎ今も交流が続く句会

三橋鷹女とゆさはり句会

編集後記

早いもので、ことしも文化祭シーズンがやって来ました。本紙でも2ページにわたり市民文化祭の日程を掲載。紙面で使用する写真を撮るため、毎年取材で出品作品を見て歩きますが、みなさんの多種多芸には本当に驚かされます。展

示・発表などが多い中で、ちょっと変わっているのが「国際市民フェスティバル」。ここでは世界の民芸品を買ったり料理を楽しんだりと楽しみ方もいろいろ。ことしもおいしい取材になりそうです。